

注 意 事 項

2019年度
国語
(問題)

< H31132081 >

- 一 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 二 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 四 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左の記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- 五 受験番号の記入にあたっては、左の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は、採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)

57001番



万	千	百	十	一
5	7	0	0	1

(数字見本)

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 六 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 七 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
- 八 いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
- 九 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

冷静に判断すれば、真に人間より賢い汎用人工知能だの超人工知能だのが近々あらわれる可能性は、まずない。シンギュラリティ仮説など、一神教文化の世俗化がもたらしたa虚妄である。

とはいえ、その実現をめざして、巨額の資金にもとづく研究が繰り広げられ、何やら大魔神めいた汎用人工知能の宣伝が、マスコミを賑わわせるようになることは十分に考えられる。汎用人工知能と称するコンピュータ技術がビッグデータ分析に従事しはじめる日もそれほど遠くないだろう。このとき、いったい何が起きるのだろうか。

①人間はもとも自律系なので、根源的な自由をもっている。とはいうものの、現実には割合に不自由な社会のなかに組み込まれて行動している。誰もが、企業や官庁、学校、家庭などさまざまな社会集団のメンバーであり、所属する社会集団のコミュニケーションに参加しながら暮らしている。この社会集団は情報学的には一種のコミュニケーション・システムなのだが、そこではコミュニケーションが集団内のメンバーによってA的に生み出されている。だから社会集団も自律的なコミュニケーション・システムと見なせるわけだ。

さて、この社会集団から見れば、個々のメンバーはそれぞれ役割をもっていて、いわば、コンピュータのように決まった機能をはたしている。つまり、人間は、本来は自律的なのだが、社会的制約のもとで、あたかも他律システムのように振る舞っているのである。

そうはいっても、人間がコンピュータのように正確無比に作動しているとは、誰も思っていない。たとえばバスの運転手は決まった路線を定刻通りに運転しているが、疲れてくると運転が荒くなったりする。その代わり、交通事故のときは、臨機応変に迂回してくれたりもする。脚を怪我して杖をついた乗客の乗り降りを手伝ってくれることもある。バス運転手は、いつもは他律的な自動運転ロボットのような機能をはたしているのだが、本当は血の通った生身の人間で、家族もあり、自律的な心をもっていることくらい、誰でも知っているのだ。

この社会集団のなかに人工知能エージェントが参入してきたらどうなるだろうか。すでに自動運転機能はさかんに自動車メーカーで研究されているし、むしろ悪いことばかりではない。疲れを知らない運転ロボットは、気候条件や道路混雑状況に適切に対応し、効率的かつ安全に乗客を目的地まで運んでくれるだろう。ただ、^②怪我人には手を貸してくれないだろうし、事故時の臨機応変の措置などはあまり期待できない。乗客としては、自動運転機能を活用するにせよ、万一にそなえて人間の運転手もいてほしいと思うはずである。

要するに問題は、

X

なのだ。

われわれの「上」で大魔神が君臨するなら、つまり、「汎用」と称する人工知能がビッグデータ分析にもとづいて社会的判断を実行し、必要な決定を次々と下すとなると、ことはひどく厄介になる。

たとえば、株の売買など、金融の運用については、すでに人工知能が一部取りいられているようだ。この傾向は加速されつつある。やがて、金融や経理事務などにくわえ、法律運用や人事管理、教育など、社会集団のさまざまな面で、人間のかわりに大魔神が意思決定をおこなうようになるかもしれない。

このとき社会集団の中の人間は、大魔神である人工知能の指令にしたがう、完全に他律的な存在、機械的な作動単位に貶められてしまう。すでに、「職場業務のIT化」の掛け声のもとで、あらゆる社会集団がそういう方向に変わり始めているのだ。

むろん、チャップリンのモダンタイムスの時代とちがって、露骨に奴隷のような歯車になれと強制されるわけではない。だが、「感情をもつ（ように装う）人工知能」はいつそう巧みにわれわれをB的にあやつり、疑似コミュニケーションをしながら、われわれにさまざまな指令をあたえ続けるのである。

これはいわば「社会メガマシンの登場に他ならない。人工知能によって予めきめられた計画にしたがって、どこまでも細部にわたるルールが規定され、大魔神のお言葉に逆らえない人々を巻きこみながら、万事がしずし

ずと運行していく。

ここで少なくとも二つの問題が生じる。第一は、人工知能の指令のもとでは、状況におうじた臨機応変の措置がとれないことである。すでにふれたように、プログラムとは前もって論理的処理を準備しておくことであり、また、ビッグデータ分析とは所詮、過去のデータを **C** 的に整理した結果にすぎない。要するに、生物はリアルタイムで現在に生きている存在なのに対し、機械はあくまで過去のデータによってキッチリ規定される存在だということだ。

創造的な自由とは、生命的なものである。だから人間は、千変万化する状況のもとでも、融通をきかせて行動できるのだが、社会メガマシンはそれを阻害する。たとえば、駅のホームで、眩暈がした客がふらついて線路に落ちそうになったとき、とっさに手を差し伸べるより、どこかにある非常ボタンを探さなくてはならない。「危険な状況では非常ボタンを押せ」という指令を **b** 遵守するとそういうことになる。社会メガマシンのもとでは、本来機械的ではない人間が行動を制約され、みずから機械に近づいていってしまうのだ。

第二は繰り返になるが、基本的に人工知能には、問題解決はできても目標設定は無理、ということである。なぜなら目標というのは、生命活動と直結して「(特定の状況で) 何が大切か」という価値観にそって設定されるからである。

にもかかわらず強引に、万能の存在とあがめて問題を丸投げすれば、大魔神の人工知能はそれなりの一般的な論理を組み立て、何らかの疑似目標をつくりあげるだろう。だが、^③それは途方もなく奇妙なものではないか。

たとえば、今の日本社会は、高齢化社会で年金や医療費の高騰にくるしんでいる。問題解決のために大魔神は、「高齢者医療の自己負担率を一〇〇パーセントにする」という目標をたてるかもしれない。そうすれば、少数のお金持ちの老人は病院でたくさんのお金を払うことになるし、大多数の貧乏な老人は病院にいかず、ひっそり死んでいく。老人のタンス預金は市場に出回るし、老人の数そのものが急速に減り、高齢化社会から脱却できる。何とよいことばかり、だろうか……。

人工知能には生命尊重という価値観がないので、こういう意思決定もありうる。一事が万事で、人工知能が君臨する社会とは、論理は一貫していても、社会通念を無視した、ぞっとするほど冷酷なものになりがちなのだ。

もっとも、^④別の可能性もある。汎用人工知能の実現をめざす人々は、さすがにそこで立ち止まるだろうからだ。そして、熟考の末に、ひそかに目標設定に介入してくるのではないか。

つまり、表向きは大魔神である汎用人工知能の権威をふりかざしながら、支配層やその部下であるプログラム開発者たちが、裏でこっそりと自分たちに都合のよい目標(評価関数)を、汎用人工知能の内部パラメータとして組み込むかもしれない。そんな操作くらい、技術的には大して難しくないのである。複雑大規模なプログラムの中身は事実上、部外者には分からないからだ。こうして、コンピュータを人間に近づけるといふ名目のもとに、実はコンピュータを介して人間を奴隷に近づける計画が巧みに進められていく。

一神教的な支配とは、ほとんどそんなものである。絶対者の権威のもとで、統一的な支配の論理が言あげられ、下々の人々はそれに従わざるをえない。ところが実際には、絶対者は空っぽで、一部の支配層の人間たちが都合のよいように社会を動かすのである。シンギュラリティ仮説をそんな計画の一環と見なすのは、うがち過ぎというものだろうか。

(西垣通「ビッグデータと人工知能」による)

注 シンギュラリティ仮説……人工知能が人間の知能を超える日がくるといふ仮説。

問一 傍線部 a「虚妄」、傍線部 b「遵守」の読みをカタカナで記せ。

問二 空欄 A から空欄 C

つ選び、その記号を記せ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| A | ア | 直線 | イ | 水平 | ウ | 垂直 | エ | 系統 | オ | 循環 |
| B | ア | 神秘 | イ | 機械 | ウ | 精神 | エ | 集団 | オ | 確信 |
| C | ア | 統計 | イ | 論理 | ウ | 計画 | エ | 機能 | オ | 明示 |

問三 傍線部①「人間はもともと自律系なので、根源的な自由をもっている。とはいうものの、現実には割合に不自由な社会のなかに組み込まれて行動している」とあるが、この内容を言い換えている一文を本文中より抜き出し、はじめの五文字を記せ（句読点を含む）。

問四 空欄 X

その記号を記せ。

- ア 人間以上の有能さが人工知能エージェントにはないこと
- イ 人間の補完としての人工知能エージェントの活用
- ウ 人工知能エージェントという疑似人格の不可能性
- エ 人工知能エージェントによる人間らしさの補完
- オ 人間と人工知能エージェントの協働の仕方

問五 傍線部②「怪我人には手を貸してくれないだろうし、事故時の臨機応変の措置などはあまり期待できない」とあるが、それはなぜか。その理由を述べた次の一文の空欄 Y に当てはまる五文字を文章中より抜き出して記せ。

他律的な自動運転ロボットは人間のような

Y

を持たないため、想定外の事態に対応できないから。

問六 傍線部③「それは途方もなく奇妙なもの」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

ア 論理的には一貫性があるが、社会の常識や人間的な価値観にそぐわない目標設定になる可能性があるということ。

イ 人工知能には生命尊重の価値観がないため、目的達成のための手段が十分に理解されない可能性があるということ。

ウ 過去のデータから正確無比な判断を下すこともあるが、必ずしも人間が望むような意思決定にはならないということ。

エ 高齢化社会の現実を冷徹なまでに見据えて判断するため常識外れのような印象を持つが、そうでもしなければ日本社会の現実に対応できないということ。

オ 目標設定を汎用的人工知能に依存しても論理的な一貫性は保たれるが、その結果もたらされる社会のあり方は自分が理想とするものとは限らないということ。

問七 傍線部④「別の可能性」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

ア 疑似目標がプログラミング開発者によって操作可能になるため、支配層に都合のよい人工知能が開発されるかもしれないということ。

イ 一部の支配層がこっそりと目標設定に参入し、汎用人工知能の權威を借りて、都合よく社会を動かすかもしれないということ。

ウ 一部の支配層に代わって汎用人工知能そのものが意思を持ちはじめ、人間を奴隷に近づける計画を企てるかもしれないということ。

エ 疑似目標がプログラミング開発者によって設定されると人間の意思決定が不要になるため、支配層の描く社会になりやすいということ。

オ 一部の支配層がプログラム開発者と手を組むと汎用人工知能の操作が容易になり、直接的に社会をコントロールしやすくなるということ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近「古典新訳」という言葉を耳にすることが多くなってきた。もちろん現象自体は昔からあったことだが、日本では二〇〇〇年代以降、話題になる「古典新訳」の出版が目立って増え、一種の社会現象になってきたとも言えるだろう。

「古典新訳」とは、簡単に言ってしまうと、A ことである。「翻訳」なので、普通は外国文学についての話になるが、最近では二〇一四年に刊行が始まった池澤夏樹個人編集による『日本文学全集』（河出書房新社、全三〇巻）で日本の古典の名作が現代日本の作家たちによって、現代日本語に「新訳」されるという^①。突出したケースもあり、日本文学であつても古典はやはり現代語訳という「翻訳」の対象になるのだということが強く印象付けられた。

日本の古典の「新訳」はさておき、外国文学の「古典」の新訳について言えば、それが日本で一種のブームとして意識されるようになるにあたっては、^②二人の翻訳者が決定的に重要な役割を果たした。村上春樹と亀山郁夫である。

村上春樹はよく知られているように、小説家であると同時に、精力的な翻訳家であつて、創作と翻訳を互いに補いあう両輪のようにしてずっと文筆活動が続けてきた。強調しておきたいのだが、これは世界を見回してもほとんど類例がないことだ。私の知る限り、欧米では国際的に知られる著名な作家の場合、可能な限り多くの時間を創作のために確保し、それ以外のB な仕事は極力避けるのが普通である。小説家にとって一番大事なことは優れた小説を書くことだからだ。そういう立場からすれば、普通、翻訳は雑文書きなどと同様、

「B」な仕事になつてしまふ。

しかし、村上春樹はもともと英語で小説を読み、それを翻訳することを通して、小説家としての自分を教育し、^aキタえてきた。翻訳家としての彼は、レイモンド・カーヴァー、ジョン・アーヴィング、ティム・オブライエソといった同時代のアメリカ文学の翻訳紹介から仕事を始めているが、二〇〇〇年代に入ると、ここである「古典新訳」ブームに火をつけるような翻訳を次々に手掛けるようになった。主なものだけでも挙げておくと、

サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（二〇〇三年、白水社）

フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』（二〇〇六年、中央公論新社）

チャンドラー『ロング・グッドバイ』（二〇〇七年、早川書房）

カポーティ『ティファニーで朝食を』（二〇〇八年、新潮社）

などがある。特に大きな話題になったのは、これら一連の「古典新訳」のトップを切つて出版されたサリンジャーの名作である。名訳として長年多くの読者に愛読されてきた野崎孝による先行訳（邦題『ライ麦畑でつかまえて』）がまだ読まれ、売れ続けているにもかかわらず、村上による新訳は同じ出版社から出たうえ、野崎訳も絶版にはしないで共存させる、という異例の出版方針が取られた。村上の場合、新訳する作品は「古典」とはいつても、これまでのところ二〇世紀アメリカの有名な作品であつて、これは厳密に言えば「モダン・クラシックス」(modern classics)と呼ぶべきものだろう。なおヨーロッパでは「古典」は(英語で the classics と言う場合)、本来、古代ギリシャ・ラテンの作品をさすので、「現代の古典」というのは少々矛盾した言い方ではある。

もう一人の「古典新訳」ブームの立役者、亀山郁夫は、ロシア文学の専門家である。彼が光文社古典新訳文庫で出したドストエフスキの長編『カラマーゾフの兄弟』（全五巻、二〇〇六―二〇〇七年）は、^bセイシンな翻訳として大きな評判になり、五分冊合わせての売り上げ累計が百万部を超えた。『カラマーゾフの兄弟』と言えば、重厚長大で暗くてとつきにくいというイメージのあるロシア文学の古典の中でも（ここで言う古典とは、ロシア革命以前の、一九世紀ロシア文学だが）、最も長く難しい作品の一つである。名前のみ知られているものの、実際には通読した人が少ない、という「古典」の代表格ではないだろうか。それがミリオン・セラーになつ

たのだから、ロシア人もびっくりした。ロシアのテレビ局のクルーが私の研究室までカメラを持って来て、「^③どうして『カラマゾフの兄弟』がいまの日本でそんなに売れるのでしょうか？」と真顔で聞いたものだ。そんな問いに明確に答えられるくらいならば、今頃私自身、大金持ちになっていそうなものだが……。

冗談はさておき、日本人はひょっとしたらロシア人以上にドストエフスキーを愛読してきた国民であり、世界で最も頻繁にドストエフスキーを翻訳してきたのではないかと思われる。日本では、「ドストエフスキー全集」と銘打った多巻の翻訳著作集がこれまで繰り返し出ているし、『カラマゾフの兄弟』に限っても亀山以前にもすでに（数え方にもよるが）少なくとも十種類の翻訳が出ている。それがいまさらベストセラーになったのはなぜか？ 一つには、新訳が、現代語による極めて読みやすいものだったということがある。そもそも亀山訳は光文社が「古典新訳文庫」と銘打って二〇〇六年に立ち上げたシリーズの冒頭を飾るもので、亀山訳のヒットのおかげで、このシリーズが掲げた「古典新訳」という言葉が広く認知されたと言ってもいいだろう。日本ですでに読まれ、過去に訳されたことのある西洋文学の「モダン・クラシックス」を新しい読みやすい日本語訳で新たに提供しようという試みは、これ以前にももちろんないわけではなかったが、その機運が光文社の企画の成功のおかげで加速した。ドストエフスキー以外の多くの作家が——シェイクスピアから、トルストイ、カフカに至るまで——現代日本語の光を当てられ、新たな読者を日本で獲得するようになったのは喜ぶべきことだろう。^④新しい翻訳によって、古い作品が新しい読者と出会い、同時代を生きる文学となる。

（沼野充義「なぜ古典新訳は次々に生まれるのか？」による）

問八 傍線部 a「キタえ」、傍線部 b「セイシン」のカタカナにあてはまる漢字を楷書で記せ。

問九 空欄

A

に入るもつともふさわしい文を、次のアイオの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 今まで翻訳のない古典的文学作品を新たに翻訳出版する
- イ すでに翻訳のある古典的文学作品を新たに翻訳出版する
- ウ 既成イメージを打ち破る発想の下で古典を翻訳出版する
- エ 正統的・古典的な方法により名作を新たに翻訳出版する
- オ 将来性のある新人の翻訳家を発掘し古典を翻訳出版する

問十 傍線部①「突出したケース」とあるが、それはなぜか。その理由としてもつともふさわしいものを、次のアイオの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 多数の現代作家を動員した魅力的企画はベストセラーが約束されているから。
- イ 池澤夏樹という現代の人気作家による個人編集の企画そのものが新鮮だから。
- ウ たんなる現代語訳を翻訳と称すること自体が翻訳の一般的常識を超えるから。
- エ 研究者ではない現代作家が古典の名作の現代語訳を翻訳するのは無理だから。
- オ 日本古典の現代語訳でも企画次第では「翻訳」と呼びうることを示したから。

問十一 外国古典の新訳が注目されていることについて、傍線部②「二人の翻訳者が決定的に重要な役割を果たした」とあるが、それはなぜか。その理由として、もっともふさわしいものを次のアイオの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア いずれも翻訳文学の世界で十分な実績を積んでおり人気も高いすぐれた小説家だったから。
- イ 同時代に焦点を合わせた新訳により、名作とされた古典的な作品に新たな光を当てたから。
- ウ いずれも古典と呼ぶには新しすぎる近代の文学作品を翻訳して古典にまで引き上げたから。
- エ アメリカとロシアという超大国の代表的文学作品を取り上げた点で時代を先取りしたから。
- オ いずれも全集などという形ではなく一つの作品に絞った新訳で多くの読者を獲得したから。

問十二 空欄

B

(二箇所ある)に入るもっともふさわしい語を、次のアイオの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 予備的
- イ 専門的
- ウ 個人的
- エ 二次的
- オ 研究的

問十三 傍線部③「どうして『カラマゾフの兄弟』がいまの日本でそんなに売れるのでしょうか?」とあるが、

その答えとしてもっともふさわしいものを次のアイオの中から一つ選び、その記号を記せ。

ア もともとロシア文学に対する深い思い入れが日本人の読者にはあり、しかも現代人の語感に適合した読みやすい翻訳であったから。

イ 日本の読書人口は外から見ると激減しているかに見えて、実は難解な小説でも手に取って読もうとする教養への志向は健在だから。

ウ ソ連の崩壊に伴い、革命以前のロシアの文学思潮が復活したことにより、難解なドストエフスキーの作品も再評価されているから。

エ ドストエフスキー作品の翻訳は日本ではほとんど行われておらず、旧訳も今や手に入らない状態である時に、この新訳が出たから。

オ 現代ではまったく読まれなくなったドストエフスキー作品が、今の若者にはかえって新鮮で、しかも平俗な表現で翻訳されたから。

問十四 傍線部④「新しい翻訳によって、古い作品が新しい読者と出会い、同時代を生きる文学となる」とあるが、その説明としてもっともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

ア 洋の東西を問わず、あらゆる古典作品を日常語で翻訳することにより、それまで文学とは無縁だった人々が新たに読者となるということ。

イ 現代作家が新たな視点から先人の古典作品の翻訳を見直すことにより、作品に新たな価値を再発見して、現代的意義を与えるということ。

ウ 研究者が既成の価値観にとらわれることなく、新しいメディアを利用して海外文学を翻訳することにより、新読者層を開拓すること。

エ 古典的な名作が現代の生きた言葉で新たに翻訳されることにより、新しく現代人の読者を獲得し、現代文学として再生されるということ。

オ 古典作品がその普遍の価値により、時代を超えて生命を保ち、その時代の若い読者を獲得し、常に当代文学として生き続けるということ。

〔以下余白〕

問七

問六

問五

問四

問三

問二

A

B

C

問一

a

b

<H31132081>

受験番号	万	千	百	十	一
カナ氏名					
氏名					

(所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない)

2019年度

国語

(解 答 用 紙)

No.

1

 /

2

採点欄

(この線で二つ折りにして書きなさい)

問十四

問十三

問十二

問十一

問十

問九

問八

a

b

2019年度

国語

(解 答 用 紙)

No.

2

 /

2

採点欄